

令和2年度(2020年度)

病虫害発生予察情報 第21号

長期予報

北海道病虫害防除所 令和3年(2021年)3月30日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

札幌管区气象台発表の2月24日付の暖候期予報および3月24日付の3か月予報は以下のとおりです。

北海道地方3か月・暖候期予報

(4月から8月までの天候見通し)

暖候期 令和3年2月24日

3か月 令和3年3月24日

札幌管区气象台発表

<気温の各階級の確率(%)>

4月	20	40	40
5月	20	40	40
6月	20	30	50
6~8月	20	40	40

■低い □平年並 ■高い

<降水量の各階級の確率(%)>

4月	30	40	30
5月	30	30	40
6月	30	40	30
6~8月	20	40	40

■少ない □平年並 ■多い

春(4月) : 北海道日本海側・オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

(5月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

夏(6月) : 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、高い確率50%です。

(6月から8月) : 6月から7月は平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。その後は、天気は数日の周期で変わる見込みです。
この期間の平均気温は平年並または高い確率ともに40%、降水量は平年並または多い確率ともに40%です。

令和3年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎: やや多～多、□: 並、△: やや少～少を示す

注2) 近年の発生状況の()は、平年値がなかったため暫定的な評価

注3) あぶらな科野菜における近年の発生状況はキャベツでの発生量

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		H28	H29	H30	R1	R2	発生期	発生量
水稲	いもち病(葉)	△	△	△	△	△	並	並
	いもち病(穂)	△	△	△	△	△	並	並
	紋枯病	◎	◎	□	△	◎	並	やや多
	縞葉枯病	□	□	□	□	□	—	やや多
	ばか苗病	□	□	□	□	□	—	並
	苗立枯病	□	□	□	□	□	—	並
	種子伝染性細菌病	△	△	△	△	△	—	少
	ニカメイガ	△	△	△	△	△	—	やや少
	ヒメトビウンカ	◎	◎	□	◎	□	やや早	やや多
	イネドロオイムシ	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	△	△	△	◎	△	早	並
	イネミギワバエ	◎	□	◎	◎	□	やや早	並
	フタオビコヤガ	△	△	△	△	△	やや早	少
秋まき小麦	赤かび病	△	△	◎	◎	◎	早	多
	うどんこ病	△	△	△	△	△	早	少
	眼紋病	△	△	△	△	△	—	少
	赤かび病	◎	△	◎	△	△	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	□	□	◎	△	□	—	やや多
	ムギキモグリバエ	△	△	△	◎	□	早	やや多
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	□	◎	◎	△	△	—	やや多
	ムギキモグリバエ	△	△	△	△	△	早	並
大豆	べと病	△	□	△	△	△	並	並
	わい化病	□	□	□	□	□	—	並
	マメシクイガ	□	□	△	△	△	並	少
	食葉性鱗翅目幼虫	△	△	△	△	□	早	並
	タネバエ	△	△	△	△	□	—	並
小豆	菌核病	□	□	△	△	△	並	並
	灰色かび病	□	◎	□	△	△	並	並
	茎疫病	△	△	□	△	△	—	やや多
	食葉性鱗翅目幼虫	△	□	□	△	△	早	やや少
菜豆	菌核病	□	□	△	□	□	並	並
	灰色かび病	□	△	△	△	□	並	並
	黄化病	□	□	△	△	□	—	並
	タネバエ	△	△	△	△	△	—	やや少

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		H28	H29	H30	R1	R2	発生期	発生量
ばれいしょ	疫病	△	△	△	△	△	並	やや多
	軟腐病	◎	◎	◎	□	△	—	やや多
	黒あし病	◎	◎	□	□	□	—	並
	そうか病	△	△	△	□	□	—	やや少
	粉状そうか病	□	△	□	△	□	—	やや多
	アブラムシ類	△	△	△	△	△	早	並
てんさい	褐斑病	□	△	△	△	△	やや早	やや多
	根腐病(黒根病含)	◎	△	△	△	△	—	並
	黄化病(旧 西部萎黄病)	(△)	(△)	△	△	△	—	並
	ヨトウガ (第1回)	△	△	△	△	◎	早	並
	ヨトウガ (第2回)	△	△	△	△	□	やや早	並
たまねぎ	白斑葉枯病	△	△	□	△	△	並	並
	軟腐病	◎	□	◎	△	△	—	並
	乾腐病	△	△	△	△	△	—	やや少
	ハエ類(タネキハエ、タネハエ)	△	△	△	◎	◎	—	並
	ネギアザミウマ	◎	△	△	◎	◎	早	やや多
	ネギハモグリバエ	(△)	(△)	△	△	△	やや早	やや少
だいこん	軟腐病	◎	△	□	◎	□	—	やや多
	キスジトビハムシ	△	△	△	△	△	—	並
あぶらな科 野菜 ^{注3)}	コナガ	△	△	△	△	△	やや早	やや多
	ヨトウガ	△	△	△	△	□	早	並
りんご	モニリア病	△	△	△	△	△	遅	少
	黒星病	◎	◎	◎	◎	◎	早	やや多
	斑点落葉病	◎	◎	◎	◎	□	並	やや多
	腐らん病	◎	◎	◎	◎	◎	—	多
	ハマキムシ類	△	△	△	△	□	やや早	並
	モモシンクイガ	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	ハダニ類	△	△	△	◎	△	やや早	やや少
	キンモンホソガ	△	△	△	△	□	やや早	並

令和3年度に多発が予想される病害虫

1. 水稻の紋枯病

紋枯病は高温多湿で多発しやすい。令和2年は夏季に高温となった時期があり紋枯病の発生が目立った。近年は本病の防除が実施されていないほ場が多く、発生ほ場では伝染源の密度が高まっている可能性がある。本年は夏季の気温がやや高く、降水量もやや多いと予報されていることから注意が必要である。窒素肥料の多用を避けると共に、前年に発生が確認されたほ場では出穂前の薬剤散布を実施する。

2. 水稻のヒメトビウンカおよび縞葉枯病

ヒメトビウンカはイネ縞葉枯病を媒介し、ウイルス保毒虫率が高いほど、また、本種の発生量が多いほど、縞葉枯病の発生は多くなる。前年は秋季に各地で本種の密度増加が認められ、越冬幼虫の密度がやや高いものと推察される。本年は融雪が早く、春季の気温がやや高いと予報されており、第1回成虫の発生はやや早いと予想される。また、一部地域では保毒虫率が高い地点も認められていることから、縞葉枯病常発地域においてはウンカ類に有効な箱施用剤を使用する。ウンカ類に有効な箱施用剤を使用できない場合は、移植後から6月上旬に水面施用剤または茎葉散布剤での防除を実施する。なお、道内の広い範囲でMEP剤に対する抵抗性が確認されており、道外各地ではネオニコチノイド剤およびフェニルピラゾール剤に対する抵抗性が確認されていることから薬剤の選択には注意する。

3. 小麦の赤さび病

赤さび病は高温多照で多発しやすい。本年は4月の気温が平年よりやや高いと予報されている。そのため、本病の発生に好適な条件となり初発時期が平年より早くなると予想される。5月の気温は平年よりやや高く、6月は高いと予報されている。近年主要品種の「きたほなみ」での発生が目立っていることから、発生量は多いと予想される。上位葉での発病後の防除では十分な効果が得られないため、多発が懸念される場合には、止葉抽出期までに薬剤散布を開始する。

4. 春まき小麦の赤かび病

赤かび病は、開花時期に最も感染しやすく、この時期に降雨が多いと多発する。本年は暖候期（6～8月）の降水量がやや多いと予報されている。赤かび病は降雨があると胞子の飛散が促進され、出穂期から開花期に雨天が続くと被害が大きくなる。本病に対する防除は、開花始からの薬剤散布が重要であり、小麦の生育を観察しながら散布適期を失しないようにする。

5. 春まき小麦のムギキモグリバエ

ムギキモグリバエは、幼虫が小麦の茎内に侵入、加害する。生育初期の加害では無効分けつが増加し、出穂直前の加害では白穂や傷穂被害となる。また、出穂前の加害による出すくみ被害により有効穂数が減少するが、被害に気がつきにくく注意が必要である。春まき小麦では、は種が遅い程被害が大きくなりやすい。前年は本種の発生量は平年並であったものの、秋季も高温に経過したため越冬密度がやや高いと推測される。春まき小麦では早期は種に努め、6葉期頃まで茎葉散布を実施する。高温経過により小麦の生育が早く進む場合、防除適期を逸しないよう注意する。

6. 小豆の茎疫病

本年は暖候期（6～8月）の降水量がやや多いと予報されている。本病は土壤水分が高くなる場合に発病が激しくなるため、特に水田転換畑などではほ場の排水対策を実施する。培土処理や高畦処理も有効である。本病は土壤伝染するため、連作を避けるとともに発病しやすいほ場では抵抗性品種の栽培を検討する。本病は発病後に薬剤を散布しても効果が得られないので、大雨が予想される場合には予防的に薬剤を散布する。

7. ばれいしょの疫病

本年は暖候期（6～8月）の降水量がやや多いと予報されている。本病は降雨により多湿になると急速にまん延するため、注意が必要がある。発病後の薬剤散布では十分な効果が得られないため、初発生期予測システム（FLABS）を活用し、初発前からの予防散布を心がける。茎葉の疫病に効果があっても本病原菌による塊茎腐敗に対しては効果がない薬剤があるため注意する。

8. ばれいしょの軟腐病

本病は7～8月が高温多雨の時に発生しやすい。本年は暖候期（6～8月）の気温は平年よりやや高く、降水量がやや多いと予報されているため、本病の発生にやや好適な条件と予想される。茎葉の過繁茂を避けるために適切な施肥量とする。薬剤によっては感受性低下菌の発生が確認されているため、連用を避けてローテーション散布を心がける。

9. ばれいしょの粉状そうか病

本病は土壌が多湿になると発生しやすい。本年は暖候期（6～8月）の降水量がやや多いと予報されているため、注意が必要である。健全な種いもを使用し、常発ほ場においては抵抗性品種の作付や薬剤の全面土壌混和を行う。

10. てんさいの褐斑病

本病は7～8月が高温多湿な年に発生が多くなる。本年は夏季の気温がやや高く、降水量もやや多いと予報されていることから、本病の発生量は平年よりやや多くなると予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。また、チオファネートメチル剤、QoI剤、DMI剤およびカスガマイシン剤では道内広く耐性菌が発生しているため、薬剤の選択には注意する。薬剤散布にあたってはマンゼブ剤と銅剤を基幹とし、散布開始は初発期までに行う、散布間隔は14日以内とすることを遵守する。耕種的対策（連作の回避、抵抗性“強”品種の導入）に積極的に取り組む。

11. たまねぎのネギアザミウマ

ネギアザミウマは、高温で早発・多発しやすく、少雨で多発が助長される。前年は、空知、石狩、十勝地方で多発した。本種に対する薬剤防除は、適切な時期に開始すること、適切な防除間隔で効果の高い薬剤を使用することが重要である。本年は、夏季の降水量がやや多いものの気温がやや高いと予報されているため、発生量がやや多くなるものと予想される。たまねぎでは通常6月上旬以降に防除を開始するが、高温経過により初発期は平年より早いと予想されるため、適期に防除開始できるよう注意する。また、ピレスロイド剤抵抗性系統が道内の広い範囲で確認されており、他系統薬剤に関しても連用多用は避け、ローテーション防除を徹底する。

12. だいこんの軟腐病

本年は暖候期（6～8月）の気温は平年よりやや高く、降水量がやや多いと予報されている。本病は高温・多雨の条件により発生が助長されるため、特に夏どり栽培においては注意が必要である。抵抗性品種を栽培するとともに、窒素肥沃度の高いほ場では減肥し、適期収穫を心がける。感受性低下菌の発生している薬剤もあるため、薬剤の選択にも注意する。

13. あぶらな科野菜のコナガ

コナガは道内では越冬が困難なため、春季に道外から長距離飛来する。5月は気温がやや高いと予報されているため、第1回の幼虫発生がやや早くなると予想される。6月は気温が平年より高く降水量は平年並と予報されており、密度が急激に高まるおそれがあるため注意が必要である。近年ジアミド剤抵抗性系統の飛来が確認されており、本系統剤の使用にあたっては防除効果の確認に努める。また、いずれの系統の薬剤においても連用多用は避け、抵抗性が発達することのないようにローテーション防除を徹底する。

14. りんごの黒星病

黒星病は前年の発病葉から飛散する子のう胞子が一次伝染源となる。本年は4月の気温が平年よりやや高いと予報されており、子のう胞子の飛散開始が早まり、初発時期も早まると予想される。また、本年は夏季の降水量がやや多いと予報されているため、発生量は平年よりやや多いと予想される。発病後からの薬剤散布では十分な効果が得られないため、薬剤散布は予防的に、かつ散布ムラが生じないように十分な水量で実施する。また、チオファネートメチル剤、QoI剤およびDMI剤に対する耐性菌が道内に広く認められているため、薬剤の選択に特に注意する。

15. りんごの斑点落葉病

近年、本病に感受性の品種が多く栽培されている地域において多発傾向が続いている。本病は夏期が高温多雨条件になると多発しやすい。本年は暖候期（6～8月）の気温は平年よりやや高く、降水量がやや多いと予報されており、平年よりやや多い発生が予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。

16. りんごの腐らん病

腐らん病は発病部位から病原菌の胞子が分散し、感染源となる。近年発生が多い状況が続いており、感染源の除去対策が十分ではない園地もあると推察される。このような状況から本病の発生量は平年より多いと予想される。感染源を除去するために、発病部位を見つけ次第、削り取りや切り落としを行う。特に夏季になると発病部位が見つらなくなるため、早期から園地の観察に努める。削り取り等で出来た傷口が病原菌の侵入口となるため、薬剤を含んだ癒合剤を塗布する。また、休眠期防除も実施する。樹勢が弱ると感染しやすくなるため、樹勢を維持するために適切な栽培管理を行う。